

岩重博文（広島大）

【目的】 広島大学の統合移転は、1982年の工学部移転から13年を経て、1995年3月予定されていた全学部の移転を完了した。現在の東広島新キャンパスには約13,000人の学生が学んでいる。小さな地方都市へ移転したために生ずる住生活の諸問題について、周辺環境の変化とともに調査し報告する。

【方法】 東広島市にアパート等を借りて生活している大学生に対し、住生活を中心とする生活環境についてアンケート調査し、学生の満足度等について検討した。調査時期は1995年秋であり、直接配布・回収した。有効回答数は男女計404部、回収率80.8%であった。

【結果】 1) 大学生の住まいは約93%がアパートに依存している。このため、アパートの数も1993年の約7,500室から1995年の約12,800室へと増加している。以下の3項目については、1990年と1995年との調査比較により述べる。2) 建物の階高については2階建てが中心であったが徐々に中層化が進み、前回は見られなかった6階建て以上のアパートが現在約5%利用されている。3) アパートの設備としては、台所、トイレ、風呂、エアコン等の揃った部屋が前回の主流であったが、今回は、衛星放送受信装置、シャワー付洗面台、冷蔵庫、ベッド等を追加したものが主流となっている。4) 前回約15%使用されていた内線電話は究めて少なくなり、現在では約94%が直通電話となっている。以上のように、学生の住まいは徐々に改善されていく傾向が認められる。5) 市内の飲食店は、1989年の約260店から1995年には約380店に増加したが、なお学生の半数以上は不満を訴えている。